

高校生へ 私が選んだ 1冊の本

宇宙に命はあるのか

小野 雅裕 : 著
SB 新書

私たちがいつも見上げる夜空の星々には生命がいるのだろうか。スマホに夢中で下を向いている人たちも、一度顔を上げて、そして考えてほしい。もしも、そのどこにも生命がいないのであれば、我々は本当にこの宇宙の中で独りぼっちなのである。そう思うととても怖く感じてしまうが、銀河系には約 1000 億個の惑星があり、その中で人類が調査した惑星は、無人探査機が近くを通り過ぎただけのものを含めても 8 個しか存在しないらしい。つまり、人類の宇宙への旅はまだまだ始まったばかりなのである。

本書では、そんな未知なる可能性を切り開いてくれる惑星探査について、資料以外にも、各時代で常識に背を向け、自らのイマジネーションを信じて戦ってきた技術者やプログラマーの生き方を記録している。彼らの紹介があるからこそ、宇宙探査の事を知らない人たちでもこの本にのめり込んでいくのではないだろうか。特に僕が推したい人物が、フォン・ブラウン博士である。彼はロケットで宇宙へと飛ぶということが非常識であると言われた時代に、ロケットを開発して誰よりも先に人類を宇宙に飛ばしたいという夢を持ちながら、戦時中に開発資金を獲得するために軍に雇われることを躊躇なく引き受ける。その徹底的なプラグマティストの一面を併せ持つスタイルには惚れ惚れするとしか言いようがなかった。自分の夢を叶えるためには、その夢を汚さないまま現実にも向

き合わなければならないと彼の生き方は僕に教えてくれた。

本書の後半では、宇宙に我々以外の生命がいるのか、無数にある衛星の中で人類が暮らせる環境はあるのか、そして我ら人類はどこから来たのか、これらの問いに切り込んでいる。僕が気になったのは、未来ではどの惑星で人類が生活をしているか、である。しかしながら宇宙探査の関係者でさえ、地球以外の惑星について知っていることが少ないらしい。もっとも網羅的な探査を行った地球以外の世界は火星らしいが、そこでの情報も限られているのである。その事実にも驚いたのだが、火星に降り立ち総走行距離 70 km 強を走って調査をした探査機 7 台と同じように、宇宙人が地球の 7 か所に降り立って 70 km 走ったところで、地球についてほとんど分からないであろうことを考えると確かに納得である。

ここまで本書を読んで、僕が気になったことをピックアップしてきたが、おそらく作者がこの本で最も強調していることは、本書によく出てくる言葉である「イマジネーション」の持つ力である。すべての技術がイマジネーションから生まれていると言っても過言ではなく、その力の大きさは凄まじいものである。宇宙探査の未来を切り開いた技術者たちは、なぜ常識と奮闘し、その結果、新境地を開くことが出来たのか。彼らには、イマジネーションによって今はないものが見えていたのだ。作者は、人はイマジネーションの力で月へ行くと表現している。それは、選ばれた人が持つ特別な力なんかじゃない。見たことないものを想像できる、誰もが持っている力のことだ。イマジネーションはなにも宇宙探査だけに使うものではない。特に、夢に対して悲観的になってしまう人は是非とも瞼を閉じ、想像してみしてほしい。絶対にできないことではないような気がしてこないだろうか。

(広島県：修道高等学校2年 田邊 彰一)

通巻第 85 号
2019 年 4 月 1 日 発行

© 編集・発行

実教出版株式会社

代表者 小田良次

発行所 〒102-8377 東京都千代田区五番町 5
TEL. 03-3238-7777
<http://www.jikkyo.co.jp/>